（『国語学』180集　1995・3・31）

折りたくしばの

川端善明

ときに甦ってはその都度の彩りをあざやかにする一つの情景がある。阪倉篤義先生が亡くなられて、その甦りは、――いずれかえらぬ昔ながら、かえらぬその思いをとりわけ痛切にする。そのころ、京都大学では教養課程の二回生になると、学部課程の講読を一科目だけ履修することができた。そのころ――新制大学発足の初期、私が二回生になった年のそれは伊勢物語で、講師は助教授の阪倉先生であった。

国語国文学科の専攻をほぼ決めていたとはいえ二回生になったばかりの私を、講読のその時間が驚かせたものは、上級の担当者たちが平然と口にする、漢字に移す術も私にはない書名のいくつかであった。それが私を心細くさせた。ヌリゴメボンとかテンプクボンとかがどうとかで、ケツギショウがかくかくと述べ、シュウスイショウにしかじかとあるそれは、セイゴオクダンに近く考えた方がいい、何故なら……。何故なら、私の知らぬ諸本や古注に、それを暗んじて引き、自由に批判できるほどにも彼らは習熟している、そのように聞かれたのだから。とんでもないところへ、私は来たのかも知れない。自分の無知に恐怖しさえした。――この心配は、けれど、すぐに消えた。そういうことなのか、私は周囲をみまわした。

周囲をみまわすと、先生の講読は、当時多くなかった女子の学生や聴講生・卒業生もまじえた満ち足りた雰囲気にあった。時間が終るとしばしば、にぎやかな小集団が先生をとりかこみ、談笑の小さな渦が教室を流れ出た。暗い廊下をぬけて建物の外、きらめく陽光にそれは溢れ出る。必ずしも質問や応答ばかりではなかった談笑の渦は、後で思えば、国語国文学の教授たちと学生との、そのころ、先生がさまざまの繋ぎ目であることを象徴するもののようであった。ふれあいとかスキンシップとかの語が殊更に、だから安っぽく使われ出す遥か昔、従ってそれは、渦の中に入れなかった二回生の目に、高貴な華やぎとさえ映った。

≪よくよくめでたく舞ふものは花の園には蝶小鳥≫。華やぎの感覚がいつか私のなかに、くるくると舞う蝶小鳥の幻想風景を描

かせている。既に私の杞憂は失せ、とすれば、居るべき場所の或る予感、或いは期待がくるくると舞ったのかも知れぬ。情意情動、とりわけ感動感激のたぐいを易々に口にすまいと愚かに心をならわせていた、あれは私がはたちまえ、そして先生は三十代のなかばであられた。この年、『日本文法の話』が上梓された。——三回生になった年、先生の演習は山田孝雄『日本文法学要論』をテキストにした。国語学を専攻するつもりのなかった私は、山田孝雄はもとより、橋本進吉・時枝誠記のお名をすらろくに知らず、演習のために殆んど初めて、それらの方々を読んだ。併読する形でそれらを読んだ。

その記憶からはじめて、先生の講義は常に明晰であった。話の巧拙は生来のものであって、恐らくその基底には、話を、開く方向へ話すか閉じる方向へ話すかの相違が属しているように思われる。先生の講義の明晰は、十分に考えられ整えられた事柄の筋道、つまり論理の、その展開の機微にみごとな緩急が具わり、内容の論理がリズムにおいて枠づけられることにあった。その構造のなかで、些事ともみえることが徐々に説得的な位置を獲得してゆくのである。それを耳にすることは先ず——賛否より先に快かった。そうした構成と展開は、話を開く天性の巧みのみが果すもののようであった。あのようにすればよいのだと、そのようにすることの難しさを超えて、聞くものは思ってしまう。即ち、態度にあって既に先生は聞くものの側に居られた。話の部分に拘泥して、話の構成のとどこおりないリズムにとり残されることも、私にはあった。気づいて追いかけることもあった。とり残されて拘泥に沈みこむことも、浮き上って追いかけることもともに楽しかった。

講読にせよ演習にせよ、学生の発表に進行が委ねられるときは、しかし、先生はいつまでも学生の歩みを待たれた。そのたどたどしい展開を、或いはその絶望的な展開をさえ、奪って自分のリズムや論理へ移しかえられることは、およそなかった。講読にせよ演習にせよ、学生の解釈や見解を、肯否においてただ判定することは、殆んど先生のことに属さなかった。御自身の解釈や見解を、用意されるのは当然として、対するものとして積極的に常に提示された。だから私たちは、幼いなりにも自分たちの考えが先生のそれに一致することより、むしろ競うことを厚顔によろこんだ。説得の幼い強引や論理の若いドグマをすら、微苦笑をもって先生は許された。だから私たちは、その柔かな微苦笑のために、方法をたくらむことをすら無謀によろこんだ。

先生の主著『語構成の研究』の定まった評価をここに無駄に繰返す気はない。全体とその細部——細部に欠けるものは概説であり、細部しかないものは報告にすぎぬ。ということのまさしき逆として、私はそれを読む。

『文章と表現』『日本語の語源』『日本語表現の流れ』に及ぶ著書、夜の寝覚・竹取物語・今昔物語集の注釈、古辞書の索引、そして編著にかかる辞典類に比べるとき、『なよ竹のかぐや姫』と名付けられた一冊は、どれほど知られているであろうか。中学生

程度を対象に、竹取の全訳と伊勢・大和の抄訳を収める、古典現代語訳のシリーズの一冊である。その訳の態度は、「できるかぎり、もとの文章のとおりに訳すこと（「はじめに」）」とさりげなく記されている。そのさりげなさは、態度表明を殊更に印象づけるものではない。このように表明する言葉自体は、むしろしばしば常套ですらあろうからである。しかしこの書にあって、表明は実践をまさに語った。例えば原文と訳文の、文や句の対応は、特別の場合を措いてほとんど齟齬をもたない。律気なまでのその正確さをあるとき、「日本の古典を国文学者として訳するのですからネ」と、やはり言葉少なに私に話されたが、原文の当時の感動を、質において相似たそれとして現代の読者も感じるであろうことのために（「おわりに」）、その文章態度は選ばれた。抑制は、信念を負って一つの格調へ育つ。――この文章態度は選ばれた、としても、殆んど必然的にそれは選ばれた。何故なら、けじめ――むしろ、厳しく〈けじめ〉というより、誤解がなければ〈埒〉と呼びたいもののその自然な、従って美しい感覚こそ、先生を特徴づけるものだったからである。広くは児童文学の範疇に入る、先生としては異質な作品を、方法としての先生が統一している。その風景を読み返せば、いま、既に先生の口調において読んでいることに不意に私は気付く。

何気ない雑談のあるとき、ことの終りがたに話は及んだ。たしか或る晩年の俳優の舞台に、プロンプターが気になったことを私が口にした。――誰しも老いの醜さを晒したいものは居ないであろう、という、未だ老いぬときの思いの正しさの一般を、それなら、老いの時まで如何に持続させるのか。引き際を自らみつけたとするならば、実は際まで至らぬ健常に、しばしばその人は居るであろうし、際に至ったとき、至ったと知る健康はしばしば失われている、それが際に至ったことのかなしいしるしであろう。とすれば、醜をみせぬ方法は二つ。一つは健常にあって予め引くこと。一つは、もはやあなたの出る時ではないと告げてくれる人を、健康であることの信頼関係のなかで予め用意すること。しかし、頼まれた人は二重のさみしさに耐えねばならぬ。信頼されたその相手の衰えをそれと告げるさみしさと、告げた相手から曾ての親しみがそのとき消えるかも知れぬさみしさと――。

精神と身体と、ともにそのような際から遥かに無縁な先生であった。いずれ、美しい老年こそが、先生にあって私たちの見るはずのものであった。美しい老年のその入口で、しかし、私たちは不意に先生を見失った。その喪失感に悩みながら、私たちは思う。それは、そういうやり方で遂に老醜と無縁であることを果たされたということであろうか、と。それならばその先生を、いつの日かの私は、うらやましいとは思いたくない。うらやましいと思う私でありたくない。

蒼茫のはるかなる別れあらしめぬ
風を入れてやる胸のなかの蘆原

病に倒れられる前日、小さな用事をもって私は先生を訪ねた。大学の近くの阪倉家を、その日の受持ちの講義二つの合間に訪ねた。よかったら、と、上ってゆくことをすすめられたが、もう一つ授業がありますからと、私は帰った。たまたま投函に出かけようとされていたその手紙を、帰り道ですからと、私は預った。では先生、と、あまりにも日常的すぎる別れであった。

ときに夕暮の吉田山を越えて私は大学から帰る。夕暮の吉田山に、生前の先生はよく犬の散歩に出かけられたという。犬を連れたうつそみの先生に出会うことはなかったけれど、あまりにも日常的に別れてしまった別れが、だから日常のなかでこそ再び先生に出会わせてくれそうな気がする。今年の学会にはいらっしゃいますか。そんなことを私は尋ねる。あのあたりの秋は美しいですよ。そんなことを私は告げる。もう少し行けばとても魚のうまい土地なのです。そんなことを私は語る。ええ、去年もおととしも、こんなふうにお話していましたね。あまりに日常的な別れをしてしまうと、あの別れの続きがそのままどこかに営まれているような気さえする。《…der Schmerz, den wir jetzt fühlen, ist Teil unseres früheren Glücks…》

——京都大学教授——